

---

# 涙の傷

春桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

涙の傷

### 【Nコード】

N8411M

### 【作者名】

春桜

### 【あらすじ】

雪の降っていたある日。ウルキオラが家に帰るとそこには家族のバラバラの死体が転がっていた。家族を破壊した男はウルキオラだけを生かした。憎しみの闇の中を彼はどう生きるのか。死と生の螺旋は巡る。

## 1 蝶（前書き）

彩雲国物語のパクリです。

ブリーチですがウルキオラとかグリムジョーとかになりそうです。

世界観はヨーロッパかアメリカの山々と思っています。

織姫は後半になるかと思っています。

## 1 蝶

父はなんでも面白がつていつも笑っていた。

母は体が弱くても美しかった。

長兄は頭が良くて一番優しかった。

次兄は頭が悪かったけれど強かった。

姉はすぐ怒るけれど愛される人だった。

それはいつの日かの雪が降りしきる日だった。木々は雪によって白く染められた。その雪の中、蝶が飛んでいた。雪に当てられていてそれでも一生懸命に飛ぶ蝶を気が付けば追いかけていた。

手のひらに握り締めると蝶は硬いままに死んでしまった。その儚さは花が散るときより儚いものだった。

その蝶の屍骸を大切に握って走って帰った。

山の中をすべるように駆け、やっと自分の家にたどり着いた。小さい家でも幸せだ。そう。

幸福なのに。

扉を開けると、部屋は暖かった。夕方なのに明かりもついていな

く、ひどく暗い。いや、それ以上に臭いだ。血の臭いとはこういうもののなか？そして目の前の光景は何だ。

母の美しい手が、玄関に落ちていた。体はない。もっと奥を見ると美しい母の顔。首からしたは無かった。床に血の池が落ちる。そこに胴体が。ふつくらとあつた胸も刈り取られその辺に置かれていた。

「おかえり。」

ベシツという鈍い音が後ろでした。反射的によけたが髪の毛の少しが斬られていた。

「へー俺様の攻撃を避けるガキがいるとはなあ。驚いた。」  
恐怖？そんなもの存在しない。そんな思いが浮かび上がるならどんなによかったか。

「金目のものは頂いたよ。ついでにてめーのキレーなママとその姉貴もな。はは。こんなところに大貴族の家があるなんて誰も思わねえよなあ？でも、俺様は知ってる。残念だったなあ。ははは。」

男は高笑いする。男には血もなにもついていない。

「俺はな。ガキがほしくてな。俺を楽しませてくれるガキが。」

そついうと男は少年の胸倉を掴み持ち上げた。

「俺の名前を覚えておけよ。ウルキオラ。その傷と共にな。俺は、サイレンのオシリス。お前の家族、お前の人生を壊した男だ。そうだな。十年くらいは待っててやる。俺を殺したいなら、生きてみせろよ。」

そう言つて、両頬の目の下に涙のように流れる傷をつけた。それは一生消えることはない。そしてついでにウルキオラの両足と両腕の骨を折った。ウルキオラの絶叫がこだまする。

「生きて生きて。俺様を殺しに来い。ウルキオラ・シファア。」

それが聞こえた最後の言葉だった。

不意にあの屍骸の蝶が空に飛んで行った気がした。

この時、ウルキオラが6歳の出来事だった。

## 1 蝶（後書き）

字間違いはすみません。

解説しておく、サイレン（物語の中の殺し屋集団）

## 2 蜂（前書き）

やっぱり世界感はファンタジーみたいなに思ってるほうがいいのか  
もしれません。



## 2 蜂

「誰よりも優しくて、強くなつてね。」

それが母の口癖だった。そうなるうと思つた。それが自分の生きる道だと。

でも。

駄目だよ。母さん。俺……。壊れちゃつた。

幸い雪はやんでいた。ウルキオラは山にひとり捨てられた。手も足も死ぬほどの激痛で動かない。その上、顔につけられた傷は痛む。血が雪に広がる。ウルキオラは気が遠のきそうだった。

あの光景。家族は全部バラバラだった。小さな家は血の海だ。思い出すたびに涙ができればいいのに。どうしてどうして。

殺してやる。

あの男を。あの男の顔を忘れない。

殺してやる。殺してやる。

血に染まった赤い瞳。髪の褐色。全て。鮮明に覚えている。

でも。母に誓った、家族に誓った約束を守りたかった。  
優しく、強い子。復讐を望めばそれはできない。  
だから。

このまま、死のう。

死ねば楽だ。死ねば家族と同じところにいける。  
ここで眠れば……。。

「俺様を殺してみろ。」

「っ!!」

声にならない思いが溢れた。それはきつと憎しみなのだろう。

何故、生を願う？

ウルキオラは顎をつかって山を下った。何かもわからない草やキノコを食べ、眠ることもなく山を降りた。

もうボロボロで、気が狂いそうだった。今、ウルキオラを突き動かしたのはあの男だった。

そんな時、人間の気配がした。目の前に足があった。ウルキオラは潰れそうな顎を上げ人を見た。視界がぼやけてうつすらしか見えな  
いが、人がいた。かすれる声でうったえた。

「お願い．．．だ。埋めてくれ．．．。」

「??」

「死．．．んだ．．．んだ。」

その言葉と共にウルキオラは気を失った。

6年後。

「先代。起きてください。朝です。」

「そうなの？ごめんね。ウルキオラ。」

12になったウルキオラは大人びて背も高かった。先代は起き上がるとウルキオラの元にやってきて頭を撫でた。

先代は綺麗な女性だった。髪の色は桃色で長くキラキラしていた。瞳は曇りがかった灰色。彼女は6年前死にかけていたウルキオラを手当てし、家族の墓を作ってくれた人だ。

「ありがとうね。でも、どうしたの？浮かない顔して。」

「お客さんが着てるんですよ。先代に。」

「私に？誰かなあ？」

ウルキオラが小さな山小屋の戸を開けた。そこには一人の人が立っていた。

初老の男だったが、スタイルがよく優しそうな目をしている男だ。ウルキオラが山で食物を探っていたときに訪ねてきたのだ。

「久しぶりだのう。ノア。」

「はい。テーラ様。お元気そうでなによりです。」

テーラと呼ばれた男は少し微笑んだ。

「それで、何の用ですか？ここまで訪ねてくるなんて。」

お茶を出し、それを飲みながら先代は言った。

「なあノアよ。ノーヴェは今どれくらいだ。」

ノーヴェとは聖府の命令の元に働く暗殺集団だ。ちなみにウルキオラもノーヴェの一人だ。実はノアという名前も先代の本名ではない。ノーヴェいちの暗殺者をさす。

「私と．．まあ、十人くらいでしょうか。今ここにいるのは、ウルキオラとグリムジョーだけです。で、何の仕事ですか。」

「最近この近辺にサイレンの本部があることがわかってな。奴等の動きが活発化しとる。」

サイレンは山賊、海賊にもなる史上最悪の殺人族だ。ウルキオラはその言葉を聞くと吐きそうになった。両頬の傷がうずく。

「で？」

「サイレンを潰してほしい。住民は日々怯えている。戦も最近は収まってきとるが、またおこるともわからん。」

「先代。」

ウルキオラは拳を堅く握りしめた。

「俺がいきます。まず、サイレンに入ります。そこからえぐりだしますよ。」

「でも。」

「大丈夫です。帰ってきます。絶対に。」

ウルキオラは強い目をしていた。復讐に燃えている目。

「．．．．わかったよ。グリムジョーも一緒に行ってくれるよね？」

物陰に隠れていた猫目のグリムジョーは恥ずかしそうにでてきた。

「わーったよ。ウルキオラ！足ひっぱんなよ！！」

「こちらのセリフだ。」

二人はいがみ合う。いつものことだ。

「二人とも。任務は必ずこなしなさい。死んでも構わないよ。」

先代は必ず生きて帰って来いとは言わない。任務を失敗したら斬り捨てる。それがノアだ。

「はい。場所を教えてください。テーラ様。」

それは綺麗な夕日が見えていた。

「ここに埋まってるの？」

「そうよ。バラバラだったから誰のかわからないけれど。君には弟か妹がいたんだね。」

先代はとても悲しそうに言った。母のおなかには赤ん坊がいたのか。  
「ありがとう．．．．。埋めてくれて．．．。」

「君は何のために生きるの？」

「俺は．．．自分を治すために生きる。」

「治す．．．？」

「壊れたから。あはは。言い訳なのかな。」

先代は黙って子供を抱きしめた。

「早く泣きなさい。今なら頬の傷には涙はしみないよ。包帯してるから。」

「えっ？」

「その傷がある限り、君は泣いてはいけないんだよ。でもね。今泣いておかないと君の家族が泣いてしまうよ。」

今までどうして泣いていなかったのか。やっとわかった気がした。  
「うつ．．．うつ．．．。」

その日、ウルキオラは声を上げて泣いた。夕日に輝く家族の墓は花が添えられた。その花が揺れるのを蜂は見た。蜂は花の蜜を吸うと少年を見据えた。

## 2 蜂（後書き）

字間違いはすいませんw



### 3 蝉（前書き）

ウルキオラの性格変わってるかもです><

### 3 蝉

ノーヴェは聖府の命令で動く暗殺集団だ。7歳のときにノーヴェに入った訳だが先代はあまりいいように思わなかったようだ。サイレンのオシリスによって家族を殺されたことは誰にも言っていない。先代にも。

初めて人を殺した日のことを覚えている。

ひどく暑い日だった。蝉の声が空や山の木々に響いた。ウルキオラは7歳。先代とある山で暮らしていた。しかし、先代は暗殺の仕事がたえなくてその時はウルキオラはノーヴェの存在も知らなかった。その山でなんとなく歩いていたウルキオラ。別に理由もなかった。いや。やっと治った足や手を動かしかつたからかもしれない。足や腕は治っても、頬の傷と心の傷は治らなかった。

ウルキオラは願った。力がほしいと。

あの男のことはあまり考えないようにしていた。憎しみに囚われそうどこか怖かったのかもしれない。

とはいえ。先代がいないのでは何も進まない。あの人は女性でありながら強いのだろう。それは感じ取っていた。あの人しか回りに人間がいないのでは頼り人は先代だけだ。

（もう。食料も採ったし、帰ろう。）  
暗くなる前に山小屋に帰ろう。そう思ったときだ。

自分と歳も変わらないだろう子供が正面から駆けてきた。髪は白髪の水色。瞳は深く濃い緑。しかし猫目で猫によく似ている。  
「なっ。」

思わず声をあげてしまったとき一瞬の隙を見てか、少年はウルキオラが持っていた食料が入った籠をとりあげるとそのまま持ち逃げされてしまった。

「待て！猫野郎！」

珍しく大きな声で叫んでしまった。

少年は猫目を背け足早に逃げている。それを脱兎の如くウルキオラは追いかけた。

少年が行った場所はウルキオラと先代が住んでいる山小屋だった。

少年は床にちょこんと座るとウルキオラを見つめた。

ウルキオラは食料をとられて機嫌が悪かったのでもいい顔はしなかったがそうも言ってられそうにない。少年はウルキオラにはない輝きをもっていたのだ。憎しみとはまた違う、強い志と意志。何か求める欲ではないように感じさせる命のような儚い輝き。

「お前がノアか！？」

開口一番どんなことを言うか期待したが普通のことだ。

「違う。先代は今はいない。だいたい何だよ。ノアって。先代は名前も教えてくれないのに。」

ふてくされたようにウルキオラは吐き捨てる。

「先代？ノアは受け継がれるのか。じゃあお前が次代のノア？」

「はあ？何言ってるんだ貴様は。俺にわかるように説明してくれ。」

「もしかしてノーヴェの一人じゃねえのか？」

「ノーヴェ？」

少年は呆れたように立つとウルキオラを威嚇するように言った。

「俺はグリムジヨ・ジャガージャック！ノーヴェ志願者だ！」

高らかに名乗ったグリムジヨ。これが彼との出会いだった。

「何にやけてんだよ。気色ワリイ。」

「失礼だな。お前と初めて会ったときのことを思い出してな。お前が名乗ったあとに色々あった。」

「……その後、先代が帰ってきてノーヴェに俺もお前も入って、そして人殺しだ。」

七歳の夏、二人は人を殺した。最初は山に住んでいた山賊。先代はどこかでこのことを恐れていたんだろう。グリムジヨのような子供が先代の下に来ることを。

「俺は後悔していない。いくらこの手を血に染めても。それが俺だ。」

「なにかっこつけてんだ。はやく、殺しに行くぞ。」

何のために、君は人を殺すんだ？

先代はノーヴェに入るときに二人に問うた。

「俺は破壊がしたい。この国に俺は壊された。だからもう破壊しな

いように破壊する。」

グリムジョーの言葉は矛盾しているように見えて簡潔だった。

「俺は……。」

「自分を生きたために。」

復讐が生きる道なのかもしれない。あの雪の日から一生逃れられな  
いだろう。それでも。

絶望の中で生きてみせる。

ウルキオラはそう先代の前で誓ったのだった。

「サイレンに入りたいんです。お願いします。」

ある屋敷に二人ははいり、副頭である男に頭を下げた。

「何者だ？そう簡単に信用できないって。」

副頭は面白そうに言った。その目は笑っていない。

「フン。いいぜ。農民の頭100個もってこい。弱いヤツはサイレンに食われる。お頭も骨のねえヤツは料理しちまうよ。」

「わかりました。」

そう、うなずいて二人は一時間もせずに戻ってきた。副頭は心底驚いた。二人で100人だと思ったのにたった一人で100人の頭を持ってきた。あわせて200人か。

「ほほう。やるじゃねえか。名前は？」

「ウルキオラ。」

「グリムジョー。」

「ようこそ。サイレンへ。地獄の砦へ。」

## 4 蠅

二人は、サイレンに入った。屋敷の中にと、副頭に言われた。この室にはウルキオラとグリムジョー以外誰もいなかった。

袋の中には大量の農民の首があった。いつの間にか、袋のあたりに蠅がたかっていた。

「これは俺達がサイレンに入るための犠牲か？」

グリムジョーは吐き捨てたように言った。

「いや．．．。」

ウルキオラは袋に近付いて、飛んでいる蠅を潰した。

「俺達が生きたための犠牲だ。俺達にはやらなきゃならないことがある。」

グリムジョーは溜息をつく。

「．．．もう1000はいったか？本当に俺達は人殺しだ．．．。」

「それがお前が選んだ生き方だろう。」

グリムジョーはやるせないように寝転がった。

ウルキオラの顔の傷がうずいた。

（あの男が．．．近くに。）

ずっと、眠るときも夢にまで見て憎み続けた男。

「頭。」

「ああ？何だ。ラケシスじゃねえか！久しぶりだなあ。」

副頭のラケシスはオシリスの持っていた酒瓶を取り上げた。

「てめえ、何する？」

「何がですか。いい加減にしてください。頭。我々は賊です。それも殺しの。金も女もここにすれば全て手に入る。そう言っただけを誘ったのは御頭でしょうに。最近は飲んだくれて・・・もう一ヶ月は殺してもいいですね。」

「・・・ふん。俺はもういいんだよ。俺より強いやつがいねえとな。どこかにいねえものか。」

ラケシスは短剣をオシリスの喉元に構える。

「俺は論外ですか。俺はいつでもあんたを殺したいと思ってんですよ？俺はサイレンが好きです。だからあんたがやらないなら俺が頭としてやりますよ。さっさと指示だしてくださいよ。」

「ははははは！！！」

オシリスは高々と笑った。室に笑い声が響く。

「・・・あんまり笑わせんなよ。ラケシス。てめえに俺が殺せるってえ？やってみるよ！！ビービー泣いてたのを拾って、副頭にまでしてやった心の優しいヤツは誰だあ？」

凍えるような殺気にラケシスは息を呑んだ。

「・・・まあ、サイレンはてめえにくれてやるよ。もう俺はよお、後4年生きられれば十分だからな。」

「4年？」

「へっ。さあ来るかなあ・・・。」



サイレンに來たが、何も動きはなかった。頭にも会えはしなかったし。副頭も顔を見せない。屋敷には住むことは許されなかった。まあ当たり前だろう。そもそもサイレンは薄汚い連中なのだ。あんな貴族のような生活が出来るわけがない。

「んで、先輩。裏切り者がいるって？」

グリムジョーは森でくつろいでいる隣の先輩に聞いた。先輩というのはサイレンに二人より何日前に入ってきた男だった。優男で（優しくはない）強そうにも見えないが一緒にいさせられる先輩だった。

「おう。何でも、聖府がな、サイレンを潰すために凄腕の新人をいれたらしいぜ。」

ウルキオラとグリムジョーはドキリとした。

「まあ、多分近いうちにどっか襲うだろ。てめえらも準備しとけよネコ、傷もの！」

なぜか彼はあだ名をつけたがる。グリムジョーはネコだからネコ。ウルキオラはやはり両頬の傷が目立つので傷ものらしい。

先輩が去ると、二人は顔を見合った。

「どうする？」

「．．．．屋敷に行つて、頭の首を取ろう。明日。」

「今夜のほうがいいんじゃないのか？」

「いや．．．今日は帰つて寝たほうが、あの先輩にも怪しまれない。」

「わかった。」

明日．．．オシリスの首を取る．．．そのことを考えると忘れかけている家族の顔を思いだした。それでも母と父の名前もでてこなくなつてゐる。そのことが悲しくて傷が痛んだ。

## 5 蛾

夜、あたりはまだ暗闇だ。ウルキオラは目をしっかりと開けている。横のグリムジョーは寝ている。

（一人．．．。）

ここは山の小屋だ。サイレンの縄張りの食品が納められている近く的小屋。ほかにも色々小屋はたってサイレンの賊たちはここに住んでいたりする。

扉が開いた。黒い人影にウルキオラはどきりとする。殺気は感じられない。

「ウルキオラ。」

「．．．先輩？」

昼間の先輩だ。

「来い。副頭が呼びだ。」

ウルキオラはグリムジョーを置いて、山小屋を出て、先輩について行った。食物庫の少し離れた所に頭と副頭がいる屋敷はある。

「失礼します。」

先輩は真剣な顔をしていた。瞳が鋭い閃光のように輝いている。

「入れ。」

二人は部屋に入り礼をする。

「．．．ユーシラス・レイアー。貴様は聖府の人間らしいな。よくここに入る気になったものだ。その度胸褒めてやる。」

副頭のラケシスはニヤリと笑った。

（先輩が．．．聖府の？）

ユーシラスは何も言わなかった。ただ黙って目の前を睨むだけ。

「ウルキオラ。」

「はい。」

ウルキオラは冷たく返事をした。

「お前の初めての仕事だ。そいつを殺せ。」

副頭は短刀をウルキオラに投げた。ウルキオラはそれをとる。

「ウルキオラ。やれ。俺の任務は失敗だ。」

「あんたは何もわかってない。先輩。まだ希望はある．．．。」

ウルキオラは俊足の速さでラケシスに乗りかかる。ウルキオラは喉元に短刀をやった。

（やられるっ．．．！）

ラケシスは自分の持っていた剣を抜く。ラケシスも早業だった。ウルキオラはラケシスに蹴りをくらわせる。

「てめえ．．．シファア家の．．．。」

ラケシスは血を吐いていった。あの日、頭が襲った一家。シファア家は貴族であつたが武術を大切にしていた、男は女を逃がすために頭と戦った。そういえば情報にあつたのと死体を数えても数が合わなかった。そうだ。一人足りなかった．．．。

「先輩は逃げてください。俺が．．．。」

「副頭！！大変です！！食物庫が火事です！！」

顔も知らないサイレンの賊が部屋に入る。それを聞いた瞬間、ウルキオラは男の首をはねた。

「先輩、行ってください。俺はノーヴェです。聖府側の人間です。あんたの任務は終わったんだよ。俺もあんたを庇いながら戦えない。」

「ウルキオラ．．．。増援を呼ぶ。それまで絶対生きてるよ！！」  
ユーシラスは強く言う。

ウルキオラは頷く。ユーシラスが去つたのを見るとウルキオラは食物庫へ向かった。

「よう。能面野郎。」

グリムジョーは小屋の外で立っていた。

「火をつけたのはお前か。」

暗くて顔が見えないが気配がわかる。

「ああ。なんでもよ、ラケシスは早くに気付いてたんだ。誰かさんが嘘の情報を流したってな。今夜、サイレンの最後……。ラケシスは事の重大さをわかって、1000人以上のサイレンの賊を用意してるぜ。」

「なるほどな……。やけに足音が多いと思った。」

たいまつをもった男たちが二人を囲んだ。

「ざっと1000人。骨が折れそうだ。」

「折れるどころか、死ぬ確立99%だな。」

二人は、鋭い目を男にむけ、一瞬で移動する。それは誰にも見えなかった。確実に首を斬る。地面に血が零れた。

「くそつ。たった二人の餓鬼にサイレンを潰させてたまるか！殺せ！！」

「頭つ……。」

「おお。ラケシス。何だ。やけにお疲れだなあ。」

ラケシスはオシリスの部屋まで来た。ダメージは大分回復したらしい。

「火事がおきました。食物庫で。やったのは12の餓鬼です。」

「12？」

「ウルキオラ・シファーとグリムジョー・ジャガージャックです。」

「．．．．ふん。来やがったか。4年も早えじゃねえか。」

オシリスは嬉しそうに笑った。

「．．．．やつを待っていたんですか？」

「違うな。俺は俺を待ってたんだ。」

「．．．．？」

「俺は6年前、あいつの家族を皆殺しにした。あいつだけは四肢をへし折って凍える雪山に捨てた。生きているはずがねえ。生きて俺を殺しにきたんならもうあいつは人間じゃねえ。俺と同じ化け物だ。」

「．．．．。」

「何人あいつに向かわせた？」

「全員です。1000人です。」

「ははっ。さすがだなあ。ラケシス。手ぬかねえこつて。でも。あいつなら1000人ぐらいいぶち殺して俺のところへ来るぜ。必ずな。」

もう明け方近くになっていた。だんだん視界が明るくなった。二人は大量の汗をかき、死ぬほど人を斬っていた。あと立っているのは数えるほど。

「はあああああ！！！！」

男が無防備に斬り込む。ウルキオラは素早くかわし、男の心臓をえぐるように刺す。もっていた剣を捨て倒れた男の剣を持ち後ろの敵に投げる。頭の額に剣が突き刺さる。

やがて森が死体だらけになった。火は食物庫を全て焼いていた。死体の異臭が森の中で臭う。

「ウルキオラ．．．。」

「俺は行く。行かなければならん。」

ウルキオラは走った。憎しみが湧き出す。グリムジョーはそこでしばらく眠ってしまうのだった。

「来たか。久しぶりだなあ。ウル。」

「久しぶりだな。オシリス。」

二人はにらみ合う。

「この6年間。俺を死ぬほど憎んだか？この俺を。」

ウルキオラは答えなかった。剣を強く握る。

わかっているのに何故問うのか。わかっている。面白いのだろう。

「さあ。始めようぜ。俺はずっと待ってたんだぜ？お前のことを。ちゃんと楽しませろ？」

オシリスは斧を振りかざす。それは強い振りで当れば確実に死ぬだろう。しかも速い。

（強いっ．．．。）

しかしウルキオラは剣の速さでは負けなかった。オシリスにも足も速い。オシリスはきつと歳をとり弱っていたのだろう。

心臓を貫かれてもなお、オシリスは最後まで嗤っていた。

「貴様は、俺の運命を辿るんだ。お前が俺を殺しにきたように。化

け物のてめえを誰かが殺しにくるその時まで――。」

それがオシリスの最後の言葉だった。ウルキオラは心臓をえぐりだした。ちゃんと潰れているのを確認すると震えが止まらなかった。上を見ると蝶が飛んでいた。あの時のような……いや。違う。蛾だ。蝶に良く似ている――。」

「俺もオシリスに似ている……?」

教えてくれ。先代。

## 6 蟻

ユーシラスが増援をひきいて駆けつけた頃には全てが終わっていた。  
「何だよ．．．。」

山に死体が数えきれないほど転がっていた光景を見たユーシラスは絶句した。率いた連中は軍の人間だったかこんな数の死体は見たことが無いだろう。男達が嘔吐するのも無理はなかった。

「グリムジョー．．．。」

「先輩．．．？」

ユーシラスがグリムジョーに駆け寄るとグリムジョーは笑っていた。少しの笑い。

「大丈夫か？お前達がやったのか。」

「ああ。」

「ウルキオラは．．．。」

グリムジョーはしばらく黙ってからうつむいて言った。

「あいつ．．．もう生きることには生きねえかもしれねえ．．．。」

「???どうということだ？」

これで終わった。全てだ。もう殺しをやらなくて済む。そう思った。

『お前は俺の運命を辿るんだ．．．』

ウルキオラの目が見開いた。目玉がでるほどに。手にしている剣が



いやおうなしに動く。止まらない。オシリスは嗤っている。心の底から嗤っているのだ。死ぬ時まで．．．。ウルキオラという憎しみの化け物に殺されたいと願っていたのだ。

ウルキオラはこの男の顔や体を全てえぐりだしたいという衝動に駆られた。

しかし、そんなことをすればこの男の思うつぼだった。ウルキオラを化け物として人々に恐れられ、人を殺し、誰かの憎しみをかい。そして誰かに殺される．．．。それをオシリスはウルキオラに辿らせたいのだ。

「もう．．．。いい。死のう。」

終わったから。家族の元に帰ろう。

『人殺しの化け物のてめえが家族の元にいけると思ってたのか？』

「黙れ！！」

ウルキオラは反射的にオシリスの腹を貫いていた。

「っ．．．！！」

どうしたいのか。わからない。殺しが殺しが好きになって取り付かれる．．．。

『君は何のために生きるの？』

「先代．．．。」

先代の優しい声が響く。

「自分を治すため．．．。」

幸せだった時を手に入れたかった。壊れた自分を壊したかった。

「すみません。先代。俺。あなたに何もできなかった。」

幸せをくれた人。恩返しどころか泥沼に突き落としそうだ。

ウルキオラが剣を抜いたその時――。

「おい！バカキオラ！！」

「グリムジョー……？」

グリムジョーが猫目を鋭くさせ室に入ってきた。

「もう終わったのか。」

「……ああ。」

「死ぬのか。」

「………。」

「死ねばいいさ。俺から先代に伝えといてやる。復讐を果たしたからもう全て怖くなってウルキオラはあの世に逃げたってな。」

「なんだと……？」

「てめえは逃げてんだよ！てめえだけが憎しみを抱いてたとも思ってたのか？ああ！？あの森に一般市民がいた。俺達はそいつらも殺してんだよ。サイレンが怖くて金で雇われて農民もラケシスはいれた。家族のために農民は戦って死んだんだ。そいつの家族は誰に父を奪われた憎しみをぶつける？俺達にだ！俺んとこに餓鬼がわんさか来たよ。もったこともねえ剣を持って震える手で俺を本気の憎しみと殺意で殺そうとした。絶叫して泣いて自殺したやつもいる。そいつらの気持ちを受け止めもしねえでノコノコ逃げんなら俺はてめえを地獄まで追いかけててめえを殺してやる。……俺達は生きるんだよ。そいつらが俺達を殺しに来るまで生きなきゃなんねえ。そいつらの親が犠牲になって俺達は生きてんだからよ。」

「………。グリムジョー……。」

「帰るぞ。」

ウルキオラは前を向いた。

（理由なんか自分だけある訳じゃない。）

さようなら。俺の憎しみ。オシリス。地獄で眠れ。報いをつける。

（俺はあんたのようにはならない。オシリス。化け物は化け物を喰らうよ。）

サイレンは壊滅した。ウルキオラとグリムジョー。たった12の少年が1000人斬りを達成したことは伝説的な噂となった。しかし、ラケシスだけは生き残った。忽然と姿を消していた。また彼もウルキオラの家を調べた復讐の一人であった……。

先代ノアは家の庭で蟻を見ていた。こんなに小さいのに頑張る蟻はまるで我が子同然のあの二人のように思える。

「何を思い詰めとるんだ？ノアよ。」

依頼主のテーラが優しく微笑んでノアの後ろに立っていた。

「どうしてここに来たんです。かなり面倒な仕事をくれましたね。」

私は暗殺専門であんな組織を潰す力なんて持ってないというのに……

・あの糞ジジイ。やつぱり気に食わないです。」

「ははは。仕方ないのじゃ。王はこの国を見ておられるからのう。」

サイレンは邪魔な存在だ。そうじゃ。近い内にまた仕事だ。」

「こんどは何です。まさか反発してるとこの軍を潰せとか？それだったらあのジジイの首即刻はねますよ。」

「いやいや。違うぞ。貴公。織姫は知っているか。」

「ああ。あの童話の？知ってますよ。こう見えても私はあの子を育てましたから。暗殺や殺しの術だけでなく。」

「あの姫を暗殺してきて欲しい。」

「どういうことです。しかしあの姫が本当にいるのですか。笑えますね。」

テーラは深刻な顔をしていた。

「理由を聞かせてもらえますか。」

「あの存在は世界の歪み。人を何でも再生するなどあつてはならん。そしてまだ利用はされとらんがもし姫が外に歩けば再生が起こるのだ。再生は人を救う。しかし敵に渡れば・・・。」

「死者を蘇らす・・・か。しかし何故今なのです？そんなこと誰にでも思いつくでしょう。彼女が囚われているのならばその捕らえている者が世界を再生し王になればよい。何故それを。」

「・・・力はそう容易には使えん。しかも主というのは織姫を捕らえたきり出しはしないのだ。ある城に監禁され一生を過ごす・・・。」

「それでよいではないですか。そいつを出さなければ歪みはないでしょう？」

「それでは駄目なのだ。4年後。世界の歪みを解放するのだ。姫を殺せば世界は王のもの。」

「何故4年後なのです？テーラ様？」

「すまんの。わしは聖府に戻る。報告待っている。」

ノアには何かわからなかった。

（大丈夫だろうか。）

ノアは蟻を眺めながら祈るように目を伏せた。その時。

「先代！！」

二人の姿が見えた。ボロボロで。血の臭いがきつくてもノアは笑った。二人を愛しているから。

4年後。

「どこに行かれるんですか。先代。」

ウルキオラは16歳。もう大人の歳。声も変わり大人びて白い肌。頬の強い傷は少しうすくなったように思う。先代ノアは老けていない。相変わらず美しく気品に満ちた女。しかし凄腕の殺し屋。ウルキオラが不機嫌に聞いてきたので先代は苦笑した。

「織姫を殺しに行くんだよ。」

「織姫？童話の？」

「歪みを消すそうだ。私にはよくわからないからね。そしてこれがノアとしての私の最後の仕事。ノアは君にあげよう。」

「えっ……。」

「君は復讐をした後でもなお、人を殺した。王はそれを気にいったみたいだよ。」

もうノーヴェは王の膝元におかれウルキオラたちは聖府の城。いわば王の住むところで生活をしていた。王は老いているくせに強くてウルキオラはよくちよっかいをかけられ、いつも本気で殺そうとするのだが王は軽々と避ける強者だった。

「君はノアだ。私は引退して誰かと結婚でもしようかな。あはは。冗談だけどね。ではいつてきます。」  
先代は微笑みを浮かべ消えた。これが先代を見た最後の姿となった。

## あらすじ&二部について(前書き)

字間違いを修正しました。まだあったら無視してくださいw

## あらすじ&二部について

これから二部に入っていくわけですが読む前にこちらを読んでいただけるとありがたい。

彩雲国まるぱくりで申し訳ないwwいや。これ削除されたりするのは・・・？

いや。削除されたらされたでいいですけど。

まあ読んでいる方がいたら嬉しく思いますね。観覧数とかだしてくれたらいいのに・・・。

ではここまでの登場人物&あらすじをやっておきます。

ウルキオラ・シファー

誕生日：12月1日

貴族の子に生まれるがある事情により山の小さな家で暮らしていた。しかしサイレンのオシリスによって家族を全員殺される。四肢を折



られたが生き、先代ノアに拾われノーヴェに入る。殺しについては仕事だと思い割り切り何も思わない冷静沈着。殺すときは無表情だがオシリスだけは違ったようだ。グリムジョーとは相容れないが仕事仲間だと思っている。頬の傷は涙のようで痛々しいが最近では薄くなっている。

グリムジョー・ジャガージャック

誕生日：7月31日

何よりも破壊と殺しが好きな異端児。殺しはいつも笑顔で行うがそれによって受け止める憎しみというものをよくわかっている。元々は養い祖母が育てていたのだがそこを飛びだし破壊神になるべくノーヴェに入る。ウルキオラは実はいい仲間だと思っている。髪は水色で目は猫目。動きが早い。魚が好き。

先代ノア

誕生日：5月27日

ノーヴェで一番優秀な殺し屋、ノアを継ぐ女性。本名は明らかではないが元々は現王の娘として育てられた。頭もよく彼女は何でもできるが仕事人間で男をつくったこともない。髪は桃色で、瞳は灰色。ウルキオラとグリムジョーをわが子のように思う。

現王

老人だが武術も強く完璧な国王。性格に問題があり、よく先代やウルキオラたちをいじめて強くしている。テーラなど上役の老人は現王に絶対の忠誠を誓う。

オシリス

誕生日：8月8日

殺しが大好きなサイレンの頭。三度の飯より殺しが好きだが強いやつと戦いたいということで弱いものを殺さなくなった。ウルキオラに殺され幸せに満ちる。

ラケシス

誕生日：1月17日

殺しはあまり得意ではないが強いサイレン副頭。オシリスに拾われサイレンに入るがオシリスのことは嫌いでいつも殺したいと思っていた。非常に頭もきれるためサイレンで一番恐れられていた。

第二部を読む前に読んでください。

昔々。オリヒメという美しい姫がおりました。姫はこの世の理を知っていました。姫は何でも治す力をもっていたのでみんなから結婚を申し込まれました。

ある日。オリヒメは、オリヒメの不思議な力に目をつけた強欲な主によって捕らえられてしまいます。オリヒメははずれることの無い鎖によってしばられ、その鎖は永遠にのびました。主はオリヒメの不思議な力をつかって権力を手にしました。主は何でも与えました。自由というものの意外は。オリヒメは外に出ることを諦め室に歌を歌いながらすごしました。

そんなオリヒメの前に一人の男が現れました。男は一瞬でオリヒメに恋をしました。そしてはずれることのない鎖を解き、オリヒメと共に主の城から逃げ出しました。

そして二人は末永く幸せに暮らしたのでした。



## あらすじ&二部について（後書き）

というわけでウル織のターンがやってきます。パクリですみません

ww

というか使い方がわからないんですけど・・・第二部にするのってどうすんのー？

## 8 Sleeping Beauty

「あなたが織姫ですか。」

体は傷だらけ。服もボロボロの女性が目の前に現れた。織姫はビツクリしたが頬をゆるめた。

「あなたはだあれ？」

「私はあなたを殺しにきました。」

「何故？」

「世界の歪みを直すため……。」

「あなたは私が歪みだと言えますか？私の存在を。」

「あの方が死ぬのです。世界は壊れ、破滅に進む。あなたが死ねば彼は生きれる。」

「もう彼は寿命をつきるのに？彼が生きるから世界は破滅ではなくなると？」

「……！」

「あなたに聞きます。あなたは私の死と『』を引き換えにできますか？」

女はためらいできないと言った。そして彼女は死んだのだ。凍える鼓動を動かす時計は止まった。織姫の目の前で。

「陛下。気分は？」

「もうわしは死ぬのだな。わかるのだ。心がしぼんでいく。」

「陛下．．．。」

「テーラ。ノアは失敗したようだ。わしはもう逝くだろう。」

「テーラは涙を浮かべながら何故と聞いた。」

「それが約束なのだ。あいつの母との。ノアには悪いことを頼んでしまった。ノアの死体はどこにあるのだろうか？あいつはウルキオラとグリムジョーに葬られなければ報われん。最後までわしを想ったのだから．．．。」

「今まで死を見すぎてしまった。わしは何かをあの子らに託すこともできなかった。テーラよ。あの子らにノアの死体を渡せ。死ぬ気で捜すのだ。」

「．．．御意。」

現王は約束のときに死んでいった。

「先代遅いな。どこほつつき歩いてる？」

グリムジョーがベットに横になりながら言った。

「先代はノアを引退するそうだ。この仕事が終わたら．．．俺がノアになれと。」

ウルキオラは目をふせて言う。

「はあ！？俺じゃねえのかよ！」

「貴様な訳が無い。貴様は楽しむことしか考えないからな。」

「チツ。まあいいけどよ。隠居生活かよ。つまんねえ。先代まだわけーんだし．．。」

ウルキオラは不思議に思った。なぜ彼女はもうやめてしまうのだろう？

「ちよつといいか。」

「テーラ様？」

二人は軽く礼をする。

「王が死んだ。」

「えっ．．．。」

思考が飛ぶ。毎日部屋にきてはいじめて。先代はいつも本気で怒って殺そうとしてた。威厳のある顔つきと隙のない気配。

「心臓がとまったのだ。時計が止まるようにな。それと．．．。来てくれるか。」

テーラは室から出て行った。二人は王の元へ行くものだと思ったが違った。

ベットしかない部屋で妙に広く感じた。二人はベットに横たわる女性を見て絶句した。

「せ．．．んだい．．．？」

綺麗な顔をして無表情で彼女は眠っている。それが永遠の眠りだと彼等にはわかった。

「任務に失敗したのだ。」

それ以上テーラは何も言わなかった。きっと無残に殺されていて。何でも。ノーヴェは失敗は死を意味する。もし任務で失敗をして帰ってきて償いに死ななければならぬのだ。



ウルキオラは眠れる彼女の頬を自分に傷がある部分をなぞる。涙は出てこない。この傷があるかぎり。

「テール様。」

「．．．何だ。」

「先代の仕事。俺がきつちりかたをつけます。俺が織姫を殺します。」

「テールは思った。彼を止められる人間はこの世にはいない、と。」

どこまでも血の海で。それでも私は生きなければならない。

「母上。」

いつも氷のような笑いを浮かべるわが子が怖かった。彼はもう現れはしない。

「母上。」

呼んでも母は答えない。少女は知っていた。母が求めるのは王である父のみ。

自分は昔から子供のように笑えなかった。子供のように物事を考えられなかった。彼女の心の内も知っていたし彼女はわが子を嫌っていたのも知っていた。しかし自分は猫をかぶり仮面をかぶってきた。それが当たり前だった。

殺しを当たり前のようにはやっていた。ストレス発散だったかもしれない。

「セフィラ。」

「父上……。」

父は不意に現れた。薔薇の花の近くに。

8 Sleeping Beauty (後書き)

題名 眠れる姫君

## 9 Oath Under The Rose

転がる死体の前で父は現れた。王である父は滅多に話すことなどない。自分の名など何年も呼ばれていなかった気がする。

「お前は人殺しが楽しいか？」

王は10の娘に聞いた。血のついた剣を見ながら。

「楽しいですよ？私は狂っていますから。逃げたいんですよ。何もかもに。父上にも。」

「・・・・・・・・。」

「私は女だから誰にも必要とされない。娼婦だった母を身請けして子供を生ませた。けれど男ではなかった。私を生んだことで母は体をくずし二度と子供も産めない。そんな母は貴方に必要ない。そうでしょう？」

それでも王は黙った。

「殺して。殺して。何かが変わる訳でもない。けれど生きる？生きて子供を産め？やってられない。」

王は何も言わず薔薇の花を採った。紅く染められている薔薇。王の指先はひどく傷つく。

王は薔薇をこちらによこす。

「セフィラ。なら王女をやめ闇に生きる。私の剣となりすべて断ち切れ。人を殺せ。世界のために。」

セフィラは全て理解した。この薔薇を受け取ればもう自分は王女でなくただの殺し屋。

「いいでしょう。私は貴方の影となりましょう。あなたの剣となりましょう。使うのも捨てるのも貴方の自由だ。私はもうセフィラではない。私はただの人殺しだ。闇に生き血を飲む。私はこの薔薇に

誓いましょう。」

彼女は薔薇を胸にかざし頭をたれた。

王はどこか悲しそうに頷く。

「しかしひとつお願いがあります。」

「なんだ。」

「母と一度だけ会ってください。」

「...?」

「私が愛されていなくとも私は母を愛しました。それが伝わらなくともそれだけは確かなものです。お願いします我が君。」

父上とは二度と叫ばない。

王は頷いた。

そしてノーヴェはできあがっていく。セフィラはたった15でノアと呼ばれ王の政治のために数々の役人を殺し、勤めを果たしていくのだった。

いつも美しいと呼ばれた。嬉しくて嬉しくて輝いていたように思う。けれどあの人が私を救った。どんなに汚れている体でも。

「お前は今日から私のものだ。仕事をやめ私の子を産め。」

そう王は言った。私は一瞬で恋に落ちた。彼の輝く瞳。何もかもが自分よりも綺麗で...恋焦がれていく。

しかし彼は王だ。何人もの妻がいる。子供がいる。彼は世界を見ている。家族を殺し、全てを壊してでも彼は王になった。やはり彼のことが好きで好きでたまらない。

夜になると彼が来た。彼はややこしいことは言わず私にふれた。それがどんなに嬉しかったか。彼はつねに世界を見ているのに。みなが見ているのに彼は私だけを見ているのだ。瞳が私を射抜くようにで私を殺してしまいそうで。彼が好きになっていく。

けれど彼がたった一度だけ来ただけで子供を身籠ってしまった。すごく悲しくなった。彼はもう二度と来ないと。そして子供は女の子。成長するにつれ彼女は王のように賢く鬼のような心を持っていた。いつかこの子に喰われるのではないかと思った。

いつの間にもやらの目を伏せていた。彼を思い出す度に心は痛み悲鳴をあげる。もうすぐ迎えが来る。

「久しぶりだな。リデル。」

「あ．．．．．へい．．．．．か．．．．．」

すらっとした彼は室に入ってきた。リデルは涙が溢れた。愛しい王が自分の名を呼んだ――。

「10年ぶりくらいだな。相変わらず美しい．．．」

しかし彼女は老いている。彼女は王よりも年上で彼女はいつまでも昔のままではなかった。

「どうして．．．。どうして．．．。」

「セフィラに願われた。そしてセフィラはもうお前の娘ではない。」

「あの子が？」

「お前はあの子を愛していたか？」

愛していると言えは嘘になる。氷のような微笑。いつも自分に近付いて見せ掛けだけの母と子。そして愛していないと言えは嘘になる。愛しい人との子。愛そうとも努力した。だが。

「わかりません。」

きっぱりと言った。

「やはりお前は変わらない。名も忘れそうになった。」

「でも覚えていてくださったではありませんか。」

「そうだな。記憶力がいいのだろう。」

王はどこかに目を向けて言う。

「私もういきますわ。その前にひとつ賭けを致しませんか？」

「賭け？」

「私が勝ったらあなたの命を貰います。負ければあなたの望みを与

えましよう。」

「望みだと？」

「世界の全て。その歪み。織姫の居場所を教えましよう。そして織姫を奪う術も。」

「織姫だと．．．？」

「彼女は実在しますわ。童話の中のようにあなたが奪えばいいのです。でもあなたが勝てばですが。」

「で？どのような方法でやる？」

「この花の名をあててください。そうすれば私の負けです。いえればあなたの勝ちです。」

リデルが持ち上げた花は赤い花だった。薔薇のように紅いのに全く形は違う。彼女に似合う花だった。

リデルは首をかしげて聞いた。

「わかりませんか？」

「お前の勝ちだ。お前の言うとおり命をやろう。」

「それはよかった。聞きますがあなたは一生私を忘れませんか？」

「ああ。忘れられる訳がない。」

「よかった。」

リデルは満面の笑みを浮かべた。とても嬉しそうに。

「あなたの命は今頂きません。ですがあなたは20年後に死ぬ。

本当はもつと生きれましたがね。しかしどうしても死にたくないなら織姫を20年後のこの日に殺してください。そうすれば生きれます。」

「．．．．．お前は私を助けるのか。」

「いいえ。あなたを愛しているのです。」

「．．．．．」

「それでは愛しき人。私を忘れないで。どうか憎んでもいいから思っ  
て？先に待っているわ。」

美しき姫は永久の眠りにおちた。そして王は呪いをうけた。頭の中に声が聞こえた。

『この紅い花は桜なのですよ。あの子が私にくれたのです。嬉しかったのです。』

「この花が桜だと．．．？」

王は手のひらに納まる紅い花を見た。そして笑う。

「いい女だったな。リデル。お前のことは忘れないよ。一秒たりとも。」

王はリデルを残し室に出た。

「聞いていたか。テーラ。」

扉の外にはテーラがいた。彼は浮かない顔をして王を見据える。

「私は20年後に死ぬそうだ。織姫を殺せばいいと言っていたが．

．。さてな。どうしたものか。それまでに悔いは残さないようにするということだな。」

「はい．．．。」

テーラはこのことを20年たっても忘れなかった。



9 Oath Under The Rose (後書き)

題名 薔薇の下の誓い

BLEACH MASKEDより

「陛下。質問してもよいでしょうか？」

「何だ。言ってみろ。」

王は茶をすすりながらゆつくりと言った。テーラは難しい顔をしながら窓の外を見る。

「何故、リデル王妃の賭けをのんだのです？ どう考えてもあなたに不利だ。あなたが得るものなど．．．嘘かもしれません。」

王はふつと笑みを漏らした。

「私はあいつの美しい姿に惚れたのだ。どれだけ体が汚れていようともな。一度抱いた女だ。最後の願いくらい叶えてやりたかったのだ。それに私の命など国にとくにくれてやっていているしな。20年もくれたんだ。この国をどこにも負けぬ国にするのが私の夢だ。もはや夢は叶うだろう。」

「叶いますとも。あなたの力ならば。そしてあなたを支えるのが私の役目でしょう。」

「そんな顔で言われてもな。テーラよ。織姫は必ずいるのだぞ。知っているか。」

「．．．信じられませぬ。」

「はは。だが私が言うことは真実だ。」

王は立ち上がり、窓の外の桜を見る。

「愛すことを恐れていたのか．．．私は。もつと女を愛せばよかったのかもしれない。妃を。私の恋は届かないから．．．。」

王が愛した女は決して届きはしない。王であっても。どうしても。だから妃たちは自分を愛さない。しかしリデルは愛してくれていた。ずっと。けれどそれを返すことはできない。

「陛下。あなたを愛しているものはたくさんいますから。その愛を受け止め、この国を素晴らしいものにしてください。」

テーラは頭をたれる。王は笑って頷いた。

「母上。申し訳ありません。あなたがつけてくださった名はもう捨てます。」

元セフィラは死んだ母の墓の前で祈るように呟いた。桜を添えてやる。風でゆらゆらと揺られる桜。その花びらがまた落ちた。

「母上。幸せでしたか。ここで生きた日々は。陛下を愛した日々は。どこまでも弱い人。醜い人。それがあなただった。私にはそう見えた。母上。それでも私は愛していましたよ。私のことを憎んでいても嫌いでも何でもよかった。ただあなたが息をして目が動いてそして私を見たなら．．．私はいつでも泣けたのです。でも私は泣けなかった。あなたはそれを見てきつと泣いてしまうから。あなたが少しでも笑えるような世界を残りの時間の分だけ見せたかった。ただ．．．それだけ。」

腕の細い少女は桜の花びらをすつと手に入れてすべるように墓をなぞって立ち上がり呟いた。

「ありがとう。私の母上。永遠にさようなら。」

そして二度とここに彼女が現れることはなかった。

彼女は不思議な出会いをした。凍える雪山のしたで血を吐く小さな少年に出会った。少年は死にそうな体だった。しかし彼が言った言葉は助けてではなかった。ただ埋めてくれと。愛する家族を埋めてくれと。

彼女は少年を不思議に思った。彼はあの無残な家族の死体を見てもピクリともしなかった。ただごめんなさいと呟くだけだった。四肢が折れて気が遠くなる痛みのはずなのに彼はただしずかに家族が土に埋まるのを見ていた。涙も流さずに。

ただ埋め終わるとありがとうと言った。彼女は不思議に思った。何故この子は泣かないのだろう。自分が6歳のときなど泣いていた。ただ泣いていた。大人の前では泣かなかったけれど。彼には泣いていい理由があるのに何故そこまで強いんだろう。

彼女は少年を抱きしめ泣かせた。彼がずっとためていたことがわかったから。彼が強くて自分そっくりだとわかったから。だからその時決めた。この子を育ててあげよう。彼が望む道を導ければ。彼女が20歳のとき彼女に子供ができたのだ。彼女を愛してくれる存在ができたのだ。

「あの．．．なんて呼べば．．？」

少年は名前を彼女に問うた。ノアというのは称号。ノアはあんまり好きじゃない。口にするのはあまりよくない気がする。だから言っただけは捨てたのだ。王もテラや、役人はノアと呼んでもこの子には呼んでほしくなかった。

「先代って呼んで。」

「せ．．ん．．だい？」

本当は彼にノアを継ぐべきと心のどこかで思っていたのだろう。彼が強い意志と才能があることは四肢を折られても生きる生命力が物

語っている。自分は昔の存在でいい。そして彼が自分を忘れないでいてくれたら。それが二人目の母のような存在なのかとぼんやり思った。

（母上．．私。母親になれるでしょうか？）

どこかの星になっっているだろう母に初めて問いかけた。

グリムジョーは死んだ先代を見ていた。彼女の眠れる顔を。今まで意識したこともなかった。ただただ人を殺して殺して．．．その自分が嫌いで大好きで。世界は自分のものだ。そう思った。しかし彼女が。彼女はきつと全部知っていて。誰より人が好きでも人を殺すことしかしなかった。だれも憎まないで。だれよりも人殺しで。背負っていたものはどれだけ重かっただろう。

「安らかに眠ってくれ。誰も殺さなくていいところに。誰もがあなたを愛してくれる世界へ逝ってくれ。」

グリムジョーはそっと一筋の涙を流した。

10 Something in The Aftermath (後書き)

題名 残されたもの

## 11 To Close Your World

少女は白い部屋へ向かった。この塔には織姫以外誰もいない。少女はゆっくりと歩き扉の前で立ち止まる。

「だあれ？」

織姫の声がかかる。

少女はすつと室に入る。白い部屋。織姫は鎖につながれている。ここには庭もある。なんでもある。だけど決して鎖は解けず、ここからは出られない。

「織姫様。」

少女は頭を下げる。

「あなたもお人形なのね。可哀想な子。洗脳され、感情を消す殺すことだけしかできないお人形。こちらに来て。」

少女はゆっくりと向かう。少女の目は感情など無い。ただの命令で動く。

「お人形は私のために死んで行ってしまうの。私にはもう力がなくて食べてしまう。ごめんね。許してくれるかな。みんな。」

死んでいった子供たち。織姫は一緒にいるだけで癒しの力が働く。しかし人形たちには強くて死にたくなる。

「あなたの名前教えてくれる？」

「ユリアと申します。織姫様。」

「ユリア．．．あなたはきっと人間になれるわ。そんな気がします。ユリア。私の歌を聴きます？」

「はい！」

織姫は歌を歌った。ユリアは心が安らいだ気がした。この時点で少女の心はどこから戻ってきた。

「テラ様。」

「ウルキオラ．．．。」

ウルキオラはテラの元へとやってきた。王が眠っている場所。まだ葬式もしていない。ウルキオラは王を睨んだ。会ったときから笑って殺そうとしてきた。先代はずっと怒っていた。

「なんで死んだんだ。このジジイ。テラ様。何か知っているでしょう？」

「．．．．．。」

「先代が織姫を殺しに言った理由。あんたは知ってる。教えてくれ。」

「テラは老眼の目のはずなのにウルキオラがくつきり見えたことに驚いた。」

「言えん。じゃが陛下とノアから預かったものがある。」

テラは部屋の隅に行く。そして二つの剣を渡す。

「これは．．．．。」

「陛下とノアからだ。光と闇。太陽と月。剣は交わることはない。伝えろと言われた。」

「光と闇．．．．。太陽と月．．．。剣は交わらない。」

剣は黒い剣と白い剣だった。ウルキオラはわかった気がした。

「これは最強の剣だ。国宝．．．。何故この剣を陛下は．．．。」

「テラ様。教えてくれ。織姫の居場所を。」

テラは呟くように言った。



「織姫様。おきていらつしやいますか？」

可愛らしい顔をしたユリアが室に入ってくる。

織姫は怯えるような顔をしていた。

「織姫様．．．？」

「夢を見たのです。黒い剣と白い剣を持った男が私の世界を終わらせに来る．．．。夢を見るなんて。」

死んだあの女暗殺者が浮かぶ。あの死体の傷を治したのは織姫だった。

「正夢になるかもしれませんね。」

ユリアは織姫の腕を掴む。

「わたくしがお守りいたします！織姫様を死なせたりいたしません！」

「ユリア．．．。」

織姫はユリアを抱きしめる。人形だったユリアは人間になった。

11 To Close Your World (後書き)

題名 君の世界を終わらせるため

## 12 Legions of the Regrets

「またひどくやられたんだね。あのクソバカ王ね？」

先代はウルキオラの傷を手当てしてやる。

「あんなに逃げてるのにずっと追いかけてくるんですよ。王のくせにどんだけ暇なんだ。あのジジイ」

「ただのロリコンなんかじゃない？最近はお妃様のところに行っていないみたいだし。まあ自分の子供も全然相手にしていないみたいだけど」

ウルキオラは押し黙る。

「どうしたの？」

「ずっと聞きたかったんですけどどうして先代は殺し屋になったんです？」

先代はどこか遠くに呟いた。

「あの人のために……。私は狂っていたから。それでもあの人の誇りのために……。君には難しいかもね。」

「俺はよくわかりません。前に言いましたよね。サイレンを潰すことができて……。オシリスは俺の復讐だと。俺はそれができた。けどまだ人殺しだ。」

「やめたいかい？」

「俺はあなたのためにやってるんだ。あなたの力になれば。」

「……。ありがとう。誰かのために何かをするときそれは誇れるものだ……。どんな汚いことでも。」

「どうして死んだんだ。先代……。」

ウルキオラは黒剣と白剣をふる。双剣を扱うのは久しぶりだった。  
「クソバカ王め．．．絶対に許さん。」

木を斬る。驚くほど綺麗に斬れた。

ウルキオラは靴をはきかえに靴のある玄関に行った。座りながら靴を履くと後ろから人がきた。

「一人で行くのか？」

振り返ると上役の一人のアレクト。老人だがおちゃめで王とコンビになってよくいじめられた。

「ええ。」

「グリムジョーはつれていけないのか？」

「あんな奴。頭が悪くてすぐ敵に見つかります。俺一人で充分だ。」

「場所はわかるのか。」

「ええ。」

「その剣には不思議な力がある。その双剣がきつと織姫へと導こう。」

「これが．．．。」

どちらも交わらない剣。

ウルキオラは何も言わず出て行った。

織姫のいる城は知っていた。童話にもあった黒い塔。どこまでも黒い塔．．．。白い城が黒い塔の横にそびえたつ。それはきつと織姫を捕らえている主が住んでいるのだろう。ウルキオラは黒い塔の庭に潜入した。昼間だったから視界はよかった。

（いきなり．．．5人か。）

気配がした。5人の子供が出てくる。

（これが殺しの人形。）

殺すことしかできない能無しの子供。洗脳せれ命令しか聞けない子供。言葉もろくにはなせないはず。ウルキオラが剣を抜いた瞬間――。

「はああああ！！」

「グ、グリムジョー！？」

なんとグリムジョーが子供につっこみ蹴りをくらわした。どこから出てきた！？

「てめー。俺を置いてくな。俺も行く。」

「な。」

グリムジョーはあつという間に子供を殺してしまった。なにやらよくわからん。

「お前織姫を殺すんだろ？俺はよ。雑魚をやれるんならそれでいいんだよ。」

何も無い廊下を二人は歩いた。大分人形を殺したのに誰もこない。

「．．．．．」

「ていうかよ。童話の通りならお前が織姫を連れ去った王子様なんじゃねえか？」

「はあ！？何言ってる。俺は織姫を殺しに来たんだぞ。あんな監禁バカと、略奪ば．．．」

略奪バカになるかとは最後まで言わなかった。

「いいじゃねえか。囚われのお姫様と略奪殺し屋の愛。いかすぜ？」  
なにがいかすのか全く理解できなかったが軽く無視した。

しばらく歩いていると黒い塔に入ったはずなのになかなか扉なども見えない。

「どうするよ。どこにもねえぞ。」

「剣が反応している。方向はあつてゐる。」

また歩いていると人影が見える。

可愛らしい少女でまだ小さい。

「あなたたちはなにもの．．？」

（おい。ウルキオラ。あの餓鬼しゃべれるぜ？）

（そうだな。）

（うまく騙せば織姫のところへ案内してくれんじゃねえか？）

二人のヒソヒソ話が少女には聞こえた。

「今騙すつていいました。あなたたちは悪い人ですね。」

「え、いや。そんなこと言つてねえぜ？」

グリムジョーはごまかしたがウルキオラは進み出た。

「織姫を捜している。」

「姫様に何をするつもりですか．．．？」

「．．．．．。」

「姫様をたすけてくれますか．．．。」

「おう！嬢ちゃん。俺は姫を助けにきたんだぜ。」

グリムジョーは嘘を言う。

「ではあなたは『』を引き換えにできますか？」

「．．．？」

「できるなら命令を破つてもトビラをひらきます。」

グリムジョーは考え込む。

「できる。」

ウルキオラは答えた。

「ならばトビラをひらきます。」

そう少女が言つと奥のトビラが開いた。

「ありがとう。グリムジョー。その子を頼む。」

「はあ！？こんなすぐ潰れそうな．．．。」

「いいか。潰すな。壊すな。殺すなよ。」

ウルキオラはそう言い残し足早にトビラへ向かう。

（いったい何だ．．．。）

『セカイを引き換えにできますか．．？』

（セカイを引き換えにしたら世界はどうなる？）

疑問だらけであつたがウルキオラはトビラの奥へと進んだ。

奥は庭だつた。木々が邪魔をして進みづらい。花が咲いていたがその辺の知識は全くなかつた。どこからか歌が聞こえた。美声で美しい女の声。自然に胸に染み込んでくる。突然歌が止まつた。

「そこにいるのは誰？姿を見せなさい。」

凜とした声で彼女は言つた。双剣を握り締めウルキオラは木の陰から姿を現した。彼女は庭にある椅子に座っていたが立ち上がりウルキオラを見据えた。ウルキオラは何もいえなかつた。彼女の稲妻のような眼差し。ウルキオラがこんなにも意識がとんだのは初めてだつた。ただ彼女の瞳に殺されそんな気分になつた。

「貴様が．．織姫か。」

いまだかつてこんなも頼りない声をだしたことがない。

男は一瞬でオリヒメに恋をしました。

12 Legiones of the Regrets (後書き)

題名 悲嘆の軍勢



### 13 Curse Named Love

「あなたは殺し屋ね。よくここまで来ましたね。」

(正夢か．．．。)

「私を殺しに来たのでしょうか?」

無言。

「．．．．? そうなんでしょう?」

無言。

「ちよつと!何か答えてよ!私なんかっこ悪いじゃない!」

さすがにウルキオラも我に返った。我に返った．．．?

「ちつ．．．。貴様俺に何か金縛りでもかけたのか!?そうに決まってる!」

汗がどくどくと流れる。これほど緊張しているような感覚は初めてだ。体が動かない。

「何もしてません!本当にあなたは殺し屋ですか。信じられない。」

「俺は貴様を殺すために来たんだ。」

やっと本来の声が出たような気がする。

「．．．そうですか。なら私を殺してください。あなたの明日へと繋がるなら。」

「なんだと．．．?」

「私があなたに殺されてあなたもそれで死んでしまうなら私の犠牲はいらないでしょう?私はあちらの世界で報われません。生きるために私を殺してください。もし死ぬならとっとお帰りになって殺し屋などやめなさい。」

ウルキオラは硬直した。考えてみるとたしかに自分は先代が死んだなら殺し屋なんてしなくていい。復讐もやりたいことはした。きつとこれが最後の仕事。

「さあ。私は逃げません。どうぞ。」

ウルキオラは足を進めた。黒刀と白刀を持って。織姫はこちらをずっと見つめている。目は相変わらず輝いている。こんなに綺麗な瞳を見たのは初めてだった。

ウルキオラは腕をあげ刀を向ける。織姫はその刃をじっと見ているだけで怖がるうともしなかった。ウルキオラは沈黙ののち腕を動かした。そして――。血が流れた。

「どうして最後までやらないのです。」

織姫の頬にほんの少しの傷がついているだけだった。ウルキオラは黒刀の血をふくと織姫を見据えた。

ウルキオラは齒をギシギシさせ奥歯をかんだ。何故この女を殺せないのだろう。美しい美貌の女などどこにでもいた。見とれたことなかなかった。そしてこの女は先代が死ぬことになった原因。先代が綺麗に眠っていたあの顔――。復讐のはずだ。復讐というものをわかつている。はずなのに。

（何故――。）

織姫は不思議そうにウルキオラを見てふっと笑った。

「殺し屋にしては珍しい方ですね。殺す気が無いのなら帰ってください。」

「誰が帰ると言った。」

「は？」

「考える。貴様を殺すか。助けるか。」

織姫は目を見開いた。今なんと言った？

「考えて答えを出す。」

彼は固い意志のようだ。織姫は微笑んだ。

「いいでしょう。ずっと考えなさい。あちらに井戸があります。水が飲みたければ飲んでください。」

織姫が指差した方向にウルキオラは歩き出した。

ウルキオラは井戸から水をくみ水を飲んだ。実にうまい水だ。本来なら絶対に敵のものを飲まないがどうでもよかった。

空を見上げた。どこまでも青い。しかし何故こんなにもかすんで見えるのだろうか。ここが黒くて異質だからか。

「・・・・・・なんで隠れている。」

ウルキオラは壁に隠れている織姫に呼びかけた。

「ひとつ聞きたいことがあるのです。」

「何だ。」

「・・・・・・。」

「言え。頼むから。」

「・・・・・・では聞きますがユリアはどうしました。まだ7、8歳の可愛い少女です。まさか殺しましたか。」

「いや。殺していない。ちゃんと生きてる。俺の仲間と一緒にだ。」

「そうですか・・・・・・感謝します。」

織姫は優雅に踵を返そうとしたがじつとウルキオラを見た。

「何だ。まじまじ見ると気になるぞ。」

「気になさなければいいのです。」

「気になる。」

「気のせいです。まあいいわ。二号さん。」

「はぁ！？何だそれは？二号？」

「だって名前も名乗らないし、二人目だから二号さん。」

「名なら聞け！俺はウルキオラ・シファア！」

「そうですか。ではウルキオラ。気が済むまで考えてください。」

織姫は姿を消した。

（おかしい・・・・・・。何故誰も来ない。）

しばらく時間がたっていた。織姫が囚われているなら見張りくらいいるはずだ。何かあの城でおこっているのか或いは織姫を見張る必

要もないか。しかしあれだけの人形が死んだのだ。死体が見つかった。でもないはず。

先代は何故織姫を殺さなかったのか……。先代は帰ろうとしたのか。先代は何のために織姫を殺そうとしたのか――。

ウルキオラは閉じていた目をそっと開け立ち上がり織姫の元へ歩いた。

「答えはでしたか。」

「まあな。」

はつきり答えない言葉に織姫の眉が動いた。

「訊いていいか。」

「なんででしょう?」

「ここに女殺し屋が来ただろう。」

「……ええ。あなたあの綺麗な方の旦那さ……。」

「師匠と弟子!」

ウルキオラは声を張り上げる。どうしたらそんな発想になるんだ。

「彼女が貴様の鎖を解けなかったのは何故だ。」

織姫の腕にある鎖。それは無限に伸びる特殊な鎖。

「あの方に罪は無い。引き換えるものが大きすぎるのです。」

「セカイ……か。」

「ええ。」

「セカイって世界でいいのかな?」

「そうです。この鎖を解けば世界は壊れる。」

「は？わかった？わかったって何。」

織姫は耳を疑った。考えていた答えと全く違った。  
ウルキオラは織姫の腕を掴んだ。

「じつとしてる。傷がつく。」

「ちょ！あなた何を．．．。」

「何って鎖を解くんだが。」

「は？私の言ってたこと聞いてなかったの！？」

「聞いていた。世界が壊れるんだろう。織姫は何でも治す力を持つてる。きっと貴様は大地震の崩れた何かも人も治したんだろ。この家の主の名があがるように。」

織姫は頷く。その通りだった。

「もし鎖を解いたら地震の崩れも何もかももとに戻る。きっと世界が壊れる大惨事になる。そういうことだろう？」

「．．．．．。」

「これは俺が考えて考えて決めたことだ。」

「ふざけないで！あなたには大切なものはないの！？全て壊れてしまうのよ！？」

「ある。」

「な、ならー。」

「だが俺は全てを犠牲にするつもりなんか貴様を犠牲にさせる気もない。貴様の主は貴様がここに囚われていることで生きていけるのだろう？貴様がこれ以上犠牲になる必要はどこにもない。貴様がここにいる理由などどこにもない。貴様は人間だろう。貴様には自由に生きる権利がある。監禁変態野郎が貴様を監禁する権利なんてどこにもないんだよー。」

そついうと二つの剣を鎖に打ちつける。鎖はバキバキと崩れ落ちた。そして二人は光の世界に包まれた。

13 Curse Named Love (後書き)

題名 愛という名の呪い

## 14 Let Eat The World is End

ウルキオラの唇にやわらかいものがあつた。ウルキオラが目を開けると織姫の顔が目の前にあつた。ウルキオラは半ば自分がどういう状態かわからなかった。

（夢．．．か。）

夢ならいいと思って強く口づける。舌をいれかきまわす。目を瞑っていたので織姫がどんな顔かわからなかった。満足して口づけを弱くすると、ふつとばされた。

「な．．．。」

「生き返つたなら起きてください！」

「は？」

「心臓が止まってたんです！私があなたの心臓に血を送りました。ちゃんと動いているでしょう。」

ウルキオラは胸を触った。動いている。いや、それより．．．。

「なんだ？ここは．．．何故、川や山がある？ここはどこだ？俺が失敗したのか？」

「いいえ。鎖は解けました。しかしあの男は．．．。誰かが鎖を解いたときこの世界に私達を封印するようにしたのですね。私の力が山や川に変わったようです。海もあるかもしれませんね。」

「世界は．．．。」

「無事でしよう。本当によかった．．．。」

「．．．。ここは別の世界か。どうやってここからでる？」

「ここは主が作った世界です。でる方法は．．．あなたの黒刀と白刀ですが、もう鎖で力をつかいきりいまはただの剣です。」

「じゃあここからは出られないのか。永遠にこの誰もいない世界で、二人きり閉じ込められたってことか？」

「はい．．．そうですね。」

「そうか。まあいい。」

織姫はまた耳を疑う。まあいい??

「まずは家だな。ここは気候もあるし雨風もあるだろうからな。木があるなら作れるな。食べ物も木の実があるな。野菜もあるか。」

「あ、あ、あなたはそれでいいの!??」

「ああ?別にいい。先代と一緒に山で暮らしていたしな。貴族の育ちではない。」

「そういうことを．．．。」

「だから。いい。俺が生きるために家を作るとか畑を作るとか考えること自体立派な進歩だ。」

「?」

ウルキオラは大地に寝転がる。心地いい風が吹く。

「俺は死ぬつもりだった。空虚な世界で生きるのが嫌になったんだ。お前を殺して自分も死ぬつもりだった。でもお前は生きるために殺せと言った。生きるためにきつと今まで人間を殺した。死にたくても死ねなかった。それはずっと変わらないことだ。だから俺はもう死ぬことのために殺さない。慣れないことをした。」

「．．．．．。」

「そして俺は賭けをした。」

「賭け?」

「もしお前の鎖を解いて世界が壊れなかったら逃げないで空虚な世界のために生きようと。先代と陛下が残した世界を死ぬまで見ようと。だからここで未来がわからなくても生きる。」

「ここには誰もいない．．．のに?あなたを知る人はいないのに生きるの?」

「当たり前だ。俺は死んでいった人も俺を知っている人のために生きるんだ。大嫌いな人のためにな。」

「どうして．．．。」

織姫は何もわからないという顔をする。



「行くか。歩いたら何か見つかるだろう。」

ウルキオラは立ち上がり、つて織姫に手を差し伸べる。

織姫は手をとらず話した。

「私の鎖を何故．．．解く気になったのです？」

「．．．後悔するからだ。永遠に．．．。」

「何故．．．。」

「お前が一生何も見ないからだ。あの閉ざされた部屋で歌を歌って死ぬ。そんな面白くもない生き方をお前にさせたくなかった。」

織姫の唇が震えた。そして震える口を開ける。

「ありがとう。ウルキオラ。私の鎖を解いてくれて。あなたは自分の大切なものを引き換えにしてくれました。私もそれに答えなければなりません。あなたのいた世界に戻りましょう。あなたの大切なものの世界に。」

「．．．．．。」

「わ、私嘘をつきました。あ、あなたのことを本当を知りたくて．．．私もあの時は混乱していましたし．．．．。」

「そんな気がしていた。」

「い、いつです!？」

「お前の鎖はお前の力を弱めていたな。鎖がとけているならこの世界など抜けられるだろう。」

「そ、そうです。あなたのおかげですよ!わ、私が悪いんですよ!」

「いや。別に俺はどちらでもよかった。気が済むまでお前のそばにしようと思ったからな。」

「気が済むまでって何？」

「お前が人を信用するまで。」

織姫は言葉に詰まり顔が赤くなる。

「な、なら帰りますよ!」

「お前もちゃんと帰るんだろうな?」

「当たり前です!私を見くびらないでください!」

織姫は空を見上げた。どこまでも青い空。川は綺麗に流れて魚が踊

っていた。山はどこまでも高く空を仰いでいた。どこまでも美しい世界。でも望む世界じゃない。ずっと囚われていても仕方ないと諦めていた自分。彼はきつと全ての鎖を解いたのだ。頬の傷が目立つ少年。織姫は彼の頬に手をおく。指先で彼の傷をなぞる。治すつもりでなぞったのに治らない。

「この傷は．．．一生消えない。私でも治せない．．．人間はどこまで愚かで超越した生き物なんだろうね。」

織姫はウルキオラの手をにぎり傷にそっと口づける。そして世界はまた光に包まれる。

「ウルキオラ！ウルキオラ！死んだふりしないで起きて！」

織姫はウルキオラをさする。ウルキオラはゆっくりと目を開ける。起き上がると空は黄昏だった。虫の声がし、風が吹く。

「本当に．．．戻ってきたのか。」

「何です？その言い草。」

「もう少しあのまま二人でもよかったな．．．と。」

織姫は何も言わず立ち上がってウルキオラを見据える。

「お別れです。ウルキオラ。私は行かねばなりません。」

「わかった．．．。お前が行くのを見届けてから行く。」

ウルキオラは立ち上がって織姫を見る。とたん織姫の顔が変わる。

「あなたわかって笑ってますね！？なんでわかったのです？」

「こっちが聞きたい。顔にはだしてないのに何故笑っているかわかる？」

「わ、わかりますよ！どうしてわかったのです！？私の――。」

「力はもうからっけつで、立つのもやっとで、ただの女と同じで、帰るに帰れない。まああれだけの力をつかえば当然だろうな。」

「震えてません．．よ！」

どうして彼は全て見抜いてしまうのだろう。

「お前が力が回復するのはどれくらいだ？」

「そ、そんなのちよつと休めば．．．ってそんなの聞いてどうするのです！？」

「それまで一緒にいさせる。必ずあの家のものが追手をまわしてくる。お前が何もできないなら逃げるのは難しいだろう。俺は強いのでな。なんとかできる自身がある。」

たしかに彼は強いだろう。せつかく彼が鎖を解いてくれたのに捕まれば元に戻る。織姫は目を伏せてから一歩進んだ。

「では一年だけ．．．よろしく頼みます．．．。」

14 Let Eat The World is End (後書き)

題名 世界の果てを喰らえ

15 Confession in the Twilight (前書き)

題名 黄昏の告白

完結しました！

## 15 Confession in the Twilight

一年後。

「ウルキオラ。時がきましたね。」

いつもと変わらぬ声で織姫は言った。あのときと同じ黄昏の空の下で。

「ユリアとグリムジョーによく伝えてください。ユリアはあまり無理をしないことあの子は人一倍頭がいいからきつと苦労も多いでしょうし。グリムジョーは子供誘拐犯になりそうですから子供をさらわないことー！」

織姫は優しく目を伏せてまた開く。

「さようならです。ウルキオラ。帰ります。私の帰る場所へ。」

彼女の帰る場所とはどこなのだろう。空の彼方なのだろうか。

「お前の好きにしろ。だから帰っていい。でも帰らないでほしい。」

ウルキオラは真っ直ぐ織姫見つめる。愛おしそくに。

「愛している。」

その言葉は風に消えるような気がした。今までウルキオラは彼女に囁き続けた。愛している。結婚してほしい。妻になつてほしい。

ウルキオラが愛を囁くのはきっと生涯織姫だけ。けれど織姫には何もわからなかった。

『愛している？それはユリアやグリムジョーも同じではありませんか。何故私に言うのです？』『結婚？何ですか。そんなの意味がないでしょう？役にもたちませんよ。』『だいたい自分が馬鹿だとは思いませんか？殺しにきた女に惚れるだなんて。』と素っ気無く彼女は言い返し続けた。今日この日まで。

「確かにあなたは私にとって特別でした。でも私は帰らねばならないのです。」

「．．．わかった。」

もうウルキオラは何も言わなかった。彼女が頑固なのはわかりきっている。

「織姫。俺はお前の心がほしかった。」

一瞬織姫が驚いた顔したような気がするがウルキオラの勘違いかもしれない。

「あなたが街にいったら行きます。見送りはいりません．．。」  
ウルキオラは踵を返した。もう．．．振り返りはしなかった。

家に帰ってしばらくするとユリアとグリムジョーが帰ってきた。窓の外をぼーっとしていたので無心のように思われる。

「あれ？織姫は？まだ外か？つうか何だ。その顔は！世界の終わりにてえな顔は。またフラれたのか？いいじゃねえか。また次がんばれよ。」

「うるさい。貴様は今すぐ死ね。人生次がないこともあるんだよ！」

「で、でも．．．もう夜になります。あんなところで一人でいては．．．。呼んできます。」

「は？今なんと言った？どこに誰が一人でいるって？」

「ですから．．．．織姫様が丘の上で一人座っているのが見えますけど．．．。」

ユリアはどこまでも見える目をもつ。嘘を言う子供でもない。ウルキオラは俊足の足で外に出て行った。

「本当にあの御伽噺だな。」

グリムジョーはにやついて呟いたのだった。

「来ないで！」

織姫はウルキオラに気付き叫んだ。ウルキオラはかまわず草むらを駆けつづくまっついている織姫の腕を掴むと立たせてこちらに顔を向かせる。ウルキオラは驚いた。彼女は泣いていた。

「見ないで！私は――私は帰らねばなりません！あなたの傍にいては駄目。愛とはなんなのですか？わかりません。結婚してくれ？できるはありますがありません。なのに……なのにどうして足が動かないの！？」

織姫は泣きじやくった。ウルキオラは抱きしめる。抱きしめられる涙がと止まらなかった。

「ずっと二人でいい。愛している。」

「だ、駄目！あなたは綺麗な人と結婚して子供を作るの！」

「何故？」

「あなた貴族の息子でしよう？それに私があなたの子を見たいからよ！私はあなたの何倍も生きれるわ！あなたが消えてしまってもあなたの子をずっと見れるわ！じゃないと寂しいわ……。」

「はあ！？俺がそんなお前の思い通りになったら大間違いだ。俺はほかの誰かと結婚する気はさらさらない。」

「どうしてよ！して！」

「何だ？どうしてお前はそんなにも古い考え方なんだ。貴族といつても6歳の頃に全員殺された。今更何の力もないんだ。だからそんなのいらない。」

織姫は泣き続けた。ウルキオラの胸で。やがて泣き終わるとウルキオラは微笑む。たまにしか見られない彼の笑顔が織姫は好きだった。そしてウルキオラが抱きしめるのをやめ離すとウルキオラは少し下がる。そして手を差し伸べる。あの時のように。

「俺はお前を捕らえたりしない。お前が気の済むまで生きればいい。」

「



この手をとればきつと逃げられはしない。彼はきつと織姫にとつての鎖――。織姫は自分でわかっていた。もう彼からは逃げられない。

彼が世界で一番好きだから――。

あの物語には続きがある――。

やがてオリヒメとその男の間に子供が生まれました。可愛い女の子でした。けれど女の子はとても体が弱かったのです。オリヒメは自分の命と引き換えに死にそうな我が子を助けました。オリヒメは最後に男にこう言いました。

「私が消えても泣かないでね。この子は私の宝。あなたとの子供。私は気の済むまで生きました。嘘と思うでしょう？それでもあなたがくれた幸せは溢れていくわ。忘れないでね。私は幸せだったわ。あなたが私を愛してくれて。そして――。」

「私があなたを愛せたから――。」

E  
N  
D

## 15 Confession in the Twilight (後書き)

今までありがとうございました。あの日のほうも頑張ります。いやあゝぱくりまくりでしたね。反省します。

前半は燕青のお話が感動的だったのでウルキオラにしても良かったです。先代ことセフィラ王女はまあ鈴蘭を見立てて勝手に変にしました。またグリムジョーは静蘭にみたてましたが北斗になりました。ウルキオラも後半は昭可様になってもらいました。(しょうの漢字わかりません><)薔薇姫も織姫になってもらい・・・色々無理がありました。後半はだいぶと小説のセリフそのまま書いてたりするので申し訳ないです。色々ありましたが終わりです！ありがとうございました！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8411m/>

---

涙の傷

2010年10月12日09時56分発行